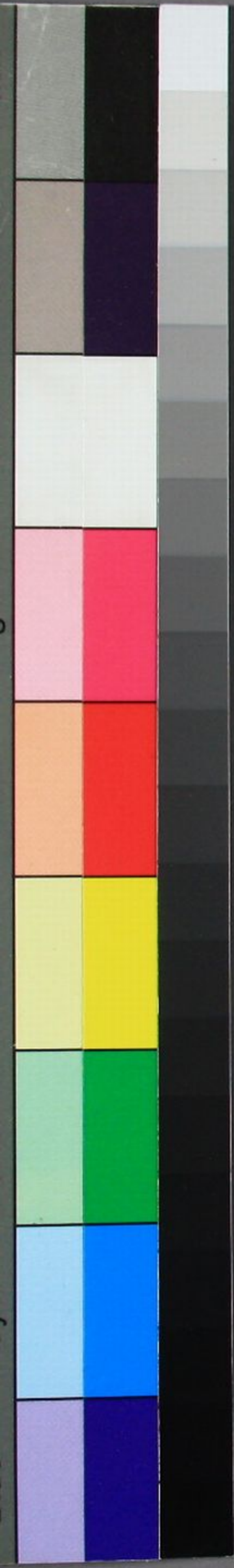


源氏續本 若紫の巻四



大和田建樹大人校訂

源氏讀本 若紫の巻 四

東京 跡見女学校藏版



若紫の巻大要

源氏の君十八歳の春より冬までの事なり。
此巻に出でたる人々左の如し。

源氏の君

良清

惟光

北山のひじり

紫上の祖母君

紫上

少納言

いぬき

源氏の家臣。

源氏の北方になるべき人。

紫上の御乳母。

紫上の家に仕ふる女の童。

北山僧都

左大臣

葵上

兵部卿の官

紫上の御大叔父。

紫上の御父君。

源氏讀本四 若紫の卷

大和田建樹校訂

わらはやみにわづらひ給ひて。よろづにまじなひ加持なせさせ給へど。しるしなくて。あまたよび起り給ひければ。ある人。北山になん。何がし寺といふ所に。かしこきおこなひ人侍る。去年の夏も世に起りて。人々まじなひわづらひしを。やがてとゞむるたぐひ。あまた侍りき。しむこらかしつる時はうたて侍るを。とくこそ試みさせ給はぬ。なほ聞ゆれば。召しにつかはしたるに。老いかゞまりて。室の外にもまかんですと申したれば。いかゞはせん。忍びて物せんどのたまひて。御供にむつまじき四五人ばかりして。また曉にたはす。やゝ深う入る所なりけり。彌生のつこもりなれば。京の花盛は皆過ぎにけり。山の櫻はまた

盛にて。入りもておはするまゝに。霞のたゞずまひもをかしろ見ゆれば。かゝる有様もならひ給はず。所せき御身にて。あづらしう思されけり。

寺のさまもいとあはれなり。峯高く深き巖の中にぞ。ひじり入り居たりける。

のほり給ひて。誰とも知らせ給はず。いといたうやつれ給へれど。しるき御さまなれば。あなかしこや。一日召し侍りしにやおはしますらん。今は此世の事を思ひ給へねば。げんがたの行も捨て忘れて侍るを。いかでかゝうおはしましつらんと。驚き騒ぎて。うち笑みつゝ見奉る。いと尊き大徳ありけり。さるべきもの作りてすかせ奉る。

加持なごまるる程。日高くさしあがりぬ。少し立ち出でゝ見渡し給へば。高さ所にて。こゝかしこ僧坊もあらはに見おろさるゝ。

唯このつゞらをりのしもに。同じ小柴なれど。うるはしうしわたして。清げなる屋廊なご續けて。木立いとよしあるは。何人の住むにかと問ひたまへば。御供なる人。これなん何がし僧都の。この二年籠り侍る坊に侍るなる。心恥かしき人住むなる所にこそあんなれ。怪しうもあまりやつしけるかな。聞きもこそすれなごたまふ。清げなる童なごあまた出で来て、閑伽奉り。花折りなごするもあらはに見ゆ。

かしこお女こそありけれ。僧都はよもさやうにはすゑ給はじを。いかなる人ならんと口々いふ。おりてのぞくもあり。をかしげなる女子ども。若き人わらはべなん見ゆるといふ。

君は行ひし給ひつゝ。日たくるまゝにいかならんと思したるを。とかうまぎらはせ給ひて。おもほし入れぬなんよく侍ると。聞ゆれば。うしろの山に立ち出でゝ。京の方を見給ふ。

遙かすみわたりにて。四方の梢。そこはかとなうけぶりわたれる
ほど。繪よいとよくも似たるかな。かゝる所に住む人。心に思ひ
残す事はあらじかしとのたまへば。これはいと淺く侍り。人の國
なごに侍る海山のありさまなごを。御覽せさせて侍らば。いかに
御繪いみじうまさらせ給はん。富士の山。なにがしの嶽なご。語
り聞ゆるもあり。また西の國のおもしろき浦々。磯の上をいひ續
くるもありて。よろづにまぎらはし聞ゆ。

近き所には。播磨の明石の浦こそ猶ごとく侍れ。何のいたり深き
隈はなけれど。唯海のおもてを見渡したるほどなん。怪しくこと
ゝころに似ず。ゆほびかある所に侍る。かの國の前の守。新發意
のむすめかしづきたる家。いといたしかし。大臣の後にて。出で
たちなごもすべかりける人の。世のひがものにて。交らひもせず
近衛の中將を捨てし。申し給はれりけるつかさなれど。かの國の

人にも少しあつられて。何のめいほくにてか。又都にも歸らん
といひて。頭もおろし侍りにけるを。少し奥まりたる山住もせで。
さる海づらに出で居たる。ひがくしきやうなれど。げにかの國
の内に。さも人の籠り居ぬべき所々もありながら。深き里は人は
なれ心すこく。若き妻子の思ひわびぬべきにより。かつは心をや
れるすまひになん侍る。

さいつころ罷り下りて侍りし序に。有様見給へによりて侍りしか
は。京にてこそ所得ぬやうなりけれ。そこら遙にいかめしうしめ
てつくれるさま。さはいへど。國の司にてしおさける事をねば。
殘の齡ゆたかに經べき心がまへも。二あくるたりけり。後の世の
勤もいとよくして。あかく法師まさりしたる人にかん侍りける。
と申せば。さてそのむすめはと問ひ給ふ。
けしうはあらず。かたち心はせなご侍るなり。代々の國の司なご。

用意殊にして。さる心はへ見すなれど。更にうけひかず。我身のかくいたづらに沈めるだにあるを。この人一人にこそあれ。思ふさまことなり。若し我に後れてその志遂げず。この思ひ置きつるすくせ違はゞ。海に入りねど。常に遺言し置きて侍る。なぞ聞ゆれば。君もをかしと聞き給ふ。

人々。海龍王の后になるべきいつきむすめなんあり。心高き若しやとて笑ふ。かくいふは。播磨の守の子の藏人より。今年かうぶり得たるなりけり。いとすきたるものあれば。かの入道の遺言破りつべき心はあらんかし。さてたゞすみよるならん。といひあへり。

いぞやさいふとも。田舎びたらん。をさなくよりさる所に生ひ出で。ふるめいたる親にのみ従ひたらんは。母こそゆるあるべけれ。よき若人童なぞ。都のやんとなき所々より。類にふれて尋

ねとりて。まほゆくこそもてなすあれ。情なき人になりゆかは。さて心安くてしもおきたらじをや。なぞいふもあり。

君は。何心ありて。海の底まで深う思ひ入るらん。底のみるもの物むつかしう。なぞのたまひて。たゞならずおもほしたり。かやうにても。なべてならず。もて憊みたる事好み給ふ御心なれば。御耳留まらんやと見奉る。

暮れかゝりぬれど。おこらせ給はずなりぬるにこそはあんめれ。はや歸らせ給ひなんとあるを。大徳。御ものゝけなぞ加はれるさまにおはなましけるを。今宵は猶しづかに加持なぞ参りて。出でさせ給へと申す。さもある事と皆人まうす。君もかゝる旅寐もならひ給はねば。さすがにをかしくて。さらは曉にどのたまふ。日もいと長きにつれづなれば。夕暮のいたう霞みたるにまぎれて。かの小柴垣のもとに立ち出で給ふ。

人々は歸し給ひて。惟光はかり御供にてのぞき給へば。唯この西
おもてにしも。持佛すゑ奉りて行ふ尼なりけり。簾すこし上げて。
花奉るめり。中の柱に寄り居て。脇息の上に經を置きて。いとな
やましげに讀み居たる尼君。たゞ人と見えす。四十餘ばかりにて。
いと白くあてに。痩せたれどつらつきふくらかに。まみのほこ。
髪の美しげにそがれたる末も。なかく長きよりも。こよあうい
まめかちきものかなと。あはれに見たまふ。
清けなるおとな二人ばかり。さてはわらはべぞ出でいり遊ぶ中に。
十ばかりにやあらんと見えて。白き衣山吹なごのなれたる着て。
走り來たる女子。あまた見えつる子ごもに似るべくもあらず。い
みじうおひさき見えて。美しげあるかたちなり。髪は扇をひろげ
たるやうにゆらくとして。顔はいと赤くすりなして立てり。
何事ぞや。わらはべと腹だち給へるかとして。尼君の見あけたるに。

少し覺えたる所あれば。子なんめりと見給ふ。
雀の子をいぬきがにがしつる。伏籠の中にこめたりつるものをと
て。いと口惜しと思へり。
この居たるおとな。例の心なしのかよるわざをして。さいなまる
ゝこそいと心づきなけれ。何方へかまかりぬる。いとをかしうや
うくなりつるものを。烏なごもこそ見つくれとて。立ちて行く。
髪ゆるらかにいと長く。めやすき人なんめり。少納言の乳母とぞ
人いふめるは。この子の後見なるべし。
尼君。いであなをさなや。いふかひあうものし給ふかな。おのが
かく今日明日になりぬるをば。何ともおほしたらで。雀慕ひ給ふ
ほこよ。罪得ることぞと常に聞ゆるを。心憂くとして。こちやとい
へば。ついるたり。つらつきいとらうたげにて。眉のわたりうち
けぶり。いわけなくかいやりたる額つきかんざし。いみじう美し。

ねひゆかさま。ゆかしき人かなと。目どまり給ふ。さるは。限なく心を盡し聞ゆる人に。いとよう似奉れるが。まもらるゝなりと思ふにも。涙ぞおつる。

尼君髪をかきなでつゝ。けづることをもうるさがり給へど。をか志の御ぐしや。いとほかなうものし給ふこそ。あはれようしろめたけれ。かばかりになれは。いとかゝらぬ人もあるものを。故姫君は。十二にて殿に後れ給ひしほど。いみじう物は思ひ知り給へりしぞかし。只今おのれ見捨て奉らば。いかで世におはせんとすらんとて。いみじう泣くを見給ふも。すゞろに悲し。

をさなでうちにもさすがようちまもりて。ふしめよなりてうつぶしたるに。こほれかゝりたる髪。つやくとめでたう見ゆ。

おひ立たんありかも知らぬ若草を。おくらす露ぞ消えんそらなき。また居たるおとな。けにとうち泣きて。

はつ草の生ひゆくするも知らぬまに。いかでか露の消えんとすらん。と聞ゆる程に。僧都あなたより来て。こなたはあらはにや侍らん。今日も端におはしましけるか。このかみの聖のかたに。源氏の中將の。わらはやみまじなひに物忘れ給ひけるを。只今なん聞きつけ侍る。いみじう忍びたまひければ。え知り侍らで。こゝに侍りながら。御とおらひにもまうでざりける。どのたまへば。あゝいみじや。いと怪まきさまを人や見つらんとて。簾おろるつ。

この世にのゝしり給ふ光源氏。かゝる序に見奉り給はんや。世を捨てたる法師の心地にも。いみじう世のうれへ忘れ。齡のぶる人の御有様あり。いで御消息聞えんとて。立つ音すれば。かへり給ひぬ。

あはれなる人を見つるかな。かゝればこのすきものどもは。かゝ

るありきをのみして。よくさるまじき人をも見つけるなりけり。たまさかに立ち出づるだに。かく思の外なることを見るよと。をかしようおほす。さてもいと美しかりつるちよかな。何人あらん。かの人の御かはりに。明暮のなぐさみにも。見ばやと思ふ心深うつきぬ。

うち臥し給へるに。僧都の御弟子。惟光を呼び出でさす。程なき所なれば。君もやがて聞き給ふ。よぎりおはしましけるよと。只今なん人申すよ。驚きながらさぶらふべきを。なにがしこの寺に籠り侍るとは。若ろ若め若ながら。忍びさせ給へるを。うれば若く思ひ給へてなん。草の御む若ろも。この坊にこそ設け侍るべけれ。いと本意なき事と。申さ給へり。

いぬる十日餘のほよより。わらはやみに煩ひ侍るを。度かさなりて堪へがうた侍れば。人の教のまゝに。俄に尋ね入り侍りつれど。

かうやうなる人のしる志願はさぬ時。はしたなかるべきも。たゞなるよりは。いとほ若う思ひ給へつゝみてなん。いたう忍び侍りつる。今そあたにもとのたまへり。

すあはち僧都参り給へり。法師なれどいと心恥か若く。人がらもやんことなく。世に思はれ給へる人なれば。軽々しき御有様をはしたなうおほす。

かく籠れる程の御物語を聞え給ひて。同じ柴の庵なれど。少し涼しき水のあがれも御覧せさせんと。せちに聞え給へば。かのまだ見ぬ人々に。ことごとく若ういひ聞かせつるを。つゝまじう思せど。あはれなりつるありさまもいぶか若うて。おはしぬ。

げにいと心ことよよしありて。同じ木草をも植ゑなし給へり。月もなきころなれば。遣水に篝火ともし。燈籠などにもまゐりたり。南おもていと清けにしつらひ給へり。そらだきもの心にくゝ薫り

出で。名香の香など匂ひ満ちたるに。君の御追風いと異なれば。内の人々も心づかひすべかんあり。

僧都世のつねなき御物語。後の世の事など聞え知らせ給ふ。我御罪のほど恐ろしう。あぢきなきことに心をしめて。生けるかぎりこれを思ひなやむべきあんあり。まゐて後の世のいみじかるべきを。思ふ續けて。かやうなるすまひもせまはしう覺え給ふものから。晝の面かけ心にかゝりて戀しければ。こゝにもの志給ふは誰にか。尋ね聞えまほなき夢を見給へしかな。今日あん思ひ合はせつる。と聞へ給へば。うち笑ひて。うちつけなる御夢語にぞ侍るなる。尋ねさせ給ひても。御心劣りせさせ給ひぬべし。故按察使の大納言は。世になくて久しくなり侍りぬれば。えしろしめさじかし。その北の方なんながしが妹に侍る。かの按察使隠れて後。世を背きて侍るが。このころ煩ふこと侍るにより。かく京にもま

かんでねば。たのもし所に籠りてものし侍るなり。と聞え給ふ。かの大納言の御むすめ物し給ふと。聞き給へしは。すきくしき方にはあらで。まめやかに聞ゆるなりと。おしあてにのたまへば。むすめたゞ一人侍りし。うせてこの十年餘にやなり侍りぬらん。故大納言は。内に奉らんなど。かしこういつき侍りしを。その本意の如くも物し侍らで。過ぎ侍りにしかば。唯この尼君一人にてあつかひ侍りし程に。いかなる人のしわざにか。兵部卿の宮なん。忍びて語らひつき給へりけるを。もとの北の方やんとなくなどして。やすからぬこと多くて。明暮物を思ひてなんなくなり侍りにし。物思ひにやまひづくものと。目に近く見給へし。なぞ申し給ふ。さらばその子なりけりと思し合はせつ。親王の御筋にて。かの人にも通ひ聞えたるにやと。いとゞあはれに見まほしく。人の程も

あてにをかしろ。なか／＼のさかしら心なく。うち語らひて心のまゝに。教へ生ふし立てゝ見はやと思す。いとあはれに物し給ふことかな。それは留め給ふかたみもなきかと。をさなかりつるゆくへの。猶たしかに知らまほしくて。問ひ給へば。なくなり侍りし程にこそ侍りしか。それも女にてぞ。それにつけても。物思ひのもよほしになん。齡の末に思ひ給へ歎き侍るめると。聞え給ふ。さればよとおほさる。あやしき事なれど。をさなき御後見におもほすべく聞え給ひてんや。思ふ心ありて。行きかゝづらふ方も侍りあがら。世に心のしまぬにやあらん。ひとりすみにてのみなん。また似けなき程と。常の人に思しなすらへて。はしたあくや。なごのたまへば。いと嬉志かるべき仰事なるを。まだむげにいわけなき程に侍るめれば。戯れにても御覧じ難くや。そも／＼女は。人にもてなされて。お

となにもなり給ふものなれば。くはしくはえとり申さす。かのおは北の方に語らひ侍りて。聞えさせんと。すくよかにいひて。物こはきさまし給へれば。若き御心に恥かしくて。えよくも聞え給はず。

阿彌陀佛もの志給ふ堂に。する事侍るころになん。初夜いまだ勤め侍らず。すぐしてさぶらはんとて。のほり給ひぬ。

君は心地もいとなやましきに。雨少しうちそゝぎ。山風ひやゝかに吹きたるに。瀧のよゝみもまさりて。音高く聞ゆ。少しねぶたけなる讀經の。たえ／＼すこく聞ゆるなご。すゞろなる人も。所から物あはれなり。ましておもほしめぐらすこと多くて。まごろまれ給はず。初夜といひしかごも。夜もいたる更けにけり。

内にも人の寐ぬけはひしるくて。いと忍びたれど。すゝの脇息に引き鳴らさるゝ音ほの聞え。なつかしう打ちをよめく音なひ。あ

てはかありと聞き給ひて。程もなく近ければ。とに立て渡したる
屏風の中を。少し引きあけて。扇をならし給へば。おほえなき心
地すべかんめれど。聞きしらぬやうにはとて。ゐざり出づる人あ
んあり。少ししぞきて。あやし。僻耳にやとたどるを。聞き給ひ
て。佛の御しるべは。暗きに入りても。更に違ふまじかんなるも
のを。とのたまふ。

御聲のいと若うあてなるに。うち出でんこわづかひも恥かしけれ
ど。いかなる方の御しるべにかは。おほつかなくと聞ゆ。ゆにう
ちつけなりこ。おほめき給はんもことわりなれど。

はつ草の若葉のうへを見つるより。旅ねの袖も露ぞかわかぬ。
と聞え給ひてんや。とのたまふ。

更にかやうの御消息。うけたまはりわくべき人も物若給はぬさま
は。しろしめさたりげたるを。誰にかはと聞ゆ。おのづからさる

やうありて。聞ゆるあらんと。思ひなし給へかし。とのたまへは。
入りて聞ゆ。

あないまめかし。この君や。世づいたる程におはするとぞおほす
らん。さるにては。かの若草を。いかで聞い給へることぞと。さ
まづあやしきに。心も亂れて。久しうあればなさけなしとて。

まくらゆふ今宵ばかりの露けさを。深山の苔にくらべさらあ
ん。ひがたう侍るものを。と聞え給ふ。

かやうの人傳なる御消息は。まだ更に聞え知らず。ならはぬこと
になん。かたじけなくとも。かゝるついでに。まめくしう聞え
さすべき事なん。と聞え給へれば。尼君。ひがこと聞き給へるな
らんと。いと恥かしき御けはひに。何事をかはいらへ聞えん。と
のたまへは。はしたあうもこそおほせと。人々聞ゆ。ゆに若やか
なる人こそうたてもあらめ。まめやかにのたまふ。かたじけなし

とて。わざりより給へり。
 うちつけにあさはかなりこ。御覽せられぬべきついでなれど。心にはさも覺え侍らねば。佛はおのづからとて。おとなしくしう恥かしげなるに。つゝまれて。とみにもえうち出で給はず。けに思ひ給へより難きついでに。かくまでのたまはせ聞えさするも。淺くはいかゞ。とのたまふ。
 あはれにうけたまはる御有様を。かの過ぎ給ひにけん御かはりに。思しないてんや。いふかひなき程の齡にて。むつまじかるべき人にも。立ちおくれ侍りにければ。怪しう浮きたるやうにて。年月をこそ重ね侍れ。同じさまに物し給ふなるを。たぐひになさせ給へど。いと聞えまほしきを。かゝる折もありがたくてなん。思されん所をも憚らず。うちいで侍りぬる。と聞え給へば。いと嬉しう思ひ給へぬべき御事ながら。聞し召しひがめたる事なぞや侍

な

らんど。つゝまじうなん。あやしき身ひとつを。たのもし人にする人なん侍れど。いとまだいふかひなき程にて。御覽じゆるさるゝ方も侍り難ければ。えなんうけたまはり留められざりける。とのたまふ。
 皆覺束なからずうけたまはるものを。どころせうおほし憚らで。思ひ給へよるさま。異なる心の程を御覽せよ。と聞え給へど。いと似けなき事を。さも知らでのたまふと思して。心解けたる御いらへもなし。僧都おはしぬれば。よしかう聞えそめ侍りぬれば。いとたのもじうあんとて。押し立て給ひつ。
 曉方よなりにければ。法華三昧行ふ堂の懺法の聲。山おろしにつきて聞えくる。いとたふとく。瀧の音に響きあひたり。
 吹きまよふみ山おろしに夢さめて。なみだもよほす瀧のおとかな。

さしぐみに袖ぬらしける山水に。すめる心はさわぎやはする。
耳馴れ侍りにけりや。と聞え給ふ。

明け行く空はいといたう霞みて。山の鳥さも。そこはかどなく
さへづりあひたり。名も知らぬ本草の花さも。いろくりに散りま
じり。錦をしけると見ゆるに。鹿のたゝずみありくも。めづらし
く見給ふに。悩ましさもまぎれはてぬ。

ひじり動きもえせねど。とかくして護身参らせ給ふ。かれたる聲
のいといたうすきひがめるも。あはれにぐうづきて。陀羅尼讀み
たり。

御迎の人々参りて。おこたり給へるよろこび聞え。内よりも御使
あり。僧都世に見えぬさまの御くたもの。何くれと谷の底まで堀
り出で。いとなみ聞え給ふ。今年ばかりの誓深う侍りて。御送
にもえ参り侍るまじき事。なか／＼にも思ひ給へらるべきかな。な

と聞えて。大御酒まゐり給ふ。

山水に心とまり侍りぬれど。内より覺束ながらせ給へるも。かし
こければあん。今この花の折過ぎず参りこん。

宮人に行きてかたらん山ざくら。風よりさきに来ても見るべ
く。どのたまふ御もてなし。こわづかひさへ目もあやあるに。

優曇華の花まち得たるこゝちして。深山櫻に目こそうつら
ぬ。と聞え給へは。ほゝゑみて。時ありて一度開くなるは。難か
んなるものを。どのたまふ。

ひじり 御土器たまはりて。

奥山の松のとほそを稀にあけて。まだ見ぬ花のかほを見るか
な。とうち泣きて見奉る。

ひじり御まもりに獨結たてまつる。見給ひて僧都。聖徳太子の百
濟より得給へりける。金剛子のすゝの玉の装束したる。やがてそ

の國より入れたる箱の唐めいたるを。透きたる袋に入れて。五葉の枝につけて。紺瑠璃の壺にも御薬も入れて。藤櫻などにつけて。所につけたる御贈物もさし上げ奉り給ふ。

君は聖よりはじめ。讀經しつる法師の布施。まうけの物ども。さまぐりに取りに遣したりければ。そのわたりの山がつまで。さるべき物ども給ひ。御誦經なさして出で給ふ。

うちに僧都入り給ひて。かの聞え給ひし事まねび聞え給へど。ともかうも只今は聞えんかたなし。若し御志あらば。今四年五年を過してこそはともかうも。とのたまへば。さなんと。同じさまにのみあるを。本意なしとおほす。御消息。僧都の許なるちひさき童して。

夕まぐればのかに花のいろを見て。けさは霞の立ちぞわづらふ。御かへし。

催馬樂
葛城の豊浦
の寺の前な
るや。豊浦

まことにや花のあたりは立ちうきと。かすむる空のけしきをも見ん。とよしある手のいとあてなるを。うちすて書い給へり。御車に奉るほど。大殿より。いづちともなくておはしにける事とて。御迎の人々。さんだちなど。あまた参り奉へり。頭の中將。左中辨。さらぬ公達もしたがひ聞えて。かやうの御供は。つかうまつり侍らんと思ひ給ふるを。あさましうおくらさせ給へる事と。恨み聞えて。いとみじき花の陰に。暫しもやすらはず立ちかへり侍らんは。飽かぬわさかな。とのたまふ。岩がくれの苔の上よ並み居て。土器まゐる。落ち来る水のさまなど。ゆるある瀧のもとなり。

頭の中將。ふどころなりける笛取り出でよ。吹きすましたり。辨の君。扇はかなう打ちならして。とよらの寺の西なるや。と歌ふ。人よりは異なる公達なるを。源氏の君いたく打ち惱みて。岩

の寺の西の
るや。榎の
葉井に。白
玉しづくや
真白玉しづ
くや。

に寄り居給へるは。たぐひなくゆゑなき御有様まで。何事にも目
うつるまじかりける。

例の筆築吹く隨身。笙の笛持たせたるすきものなどあり。僧都。
琴を自らもて参りて。これ唯御手ひとつ遊ばして。同じくは山
鳥も驚かし侍らんと。せちし聞え給へば。みだり心地いと堪へ難
きものをと。聞え給へば。げにしくからずかきならして。皆立ち
給ひぬ。

あかず口惜しと。いふかひなき法師わらはべも涙をおとしあへ
り。まして内には。年老いたる尼君達など。更にかゝる人の御有
様を見ざりつれば。この世の物とも覺え給はずと。聞えあへり。
僧都も。あはれ何のちぎりにて。かゝる御さまながら。いとむつ
かしき日の本の末の世に。生れ給ひつらんと見るに。いとなん悲
しきとて。目おしのでひ給ふ。

この若君。をさなごゝちに。めでたき人かなと見給ひて。宮の御
ありさまよりもまさり給へるかな。なごのたまふ。さらばかの人
の御子になりておはしませよと。聞ゆれば。うちうなづきて。い
とようありかんと思したり。雛遊にも繪かい給ふにも。源氏の君
とつくり出でし。清らなる衣着せかしづき給ふ。
君はまづ内に参り給ひて。日頃の御物語など聞え給ふ。いといた
う衰へにけりて。ゆゑしと思しめしたり。聖の尊かりけること
など。問はせ給ふ。くはしく奏し給へば。阿闍梨などにもなるべ
きものにこそあんめれ。行の勞は積りて。おほやけにしろしめさ
れざりし事と。尊がりのたまはせけり。
大殿参りあひ給ひて。御迎にもと思ひ給へつれど。忍びたる御あ
りきにいかに。思ひ憚りてなん。のどやかに一日二日休み給へ
とて。やがて御送りつかうまつらんと。申し給へば。さしもおほ

さねぞ。引かされてまかんで給ふ。我御車にのせ奉り給ひて。みづからは引き入りて奉れり。もてかしづき聞え給へる御心ばへのあはれなるをぞ。さすがに心苦しくおもほしける。殿にも。おはしますらんと。心づかひし給ひて。久しく見給はぬほぞ。いとゞ玉の臺にみがきしつらひ。萬をどゞへ給へり。女君。例のはひかくれて。とみにも出で給はぬを。おとゞせちに聞え給ひて。辛うじてわたり給へり。唯繪にかきたる。物の姫君のやうにしすゑられて。うちみじろき給ふ事も難く。うるはしうてもものし給へば。思ふ事もうちかすめ。山みちの物語をも聞えんに。いふかひありて。をかしろ打ちいらへ給はゞこそ。あはれならめ。世には心も解けず。疎く耻かしきものにおもほして。年の重なるに添へて。御心のへたてもまさるを。いと苦しく思はずに。時々世の常なるみけしきを見はや。堪へ難うわづらひ侍り

しをも。いかゞとたに問ひ給はぬこそ。珍しからぬことなれぞ。猶うらめしう。と聞え給ふ。

辛うじて。問はぬはつらきものよやあらんと。しりぬに見おこせ給へるまみ。いとづかしけし。けだかう美しけなる御かたちなり。

まれくは。あさましの御事や。問はぬなぞいふきは。ことにこそ侍るあれ。心うくものたまひなすかな。世と共にはしたなき御もてなしを。もし思し直る折もやと。とさまかうさまに試み聞ゆるを。いとゞおもほし疎むあんめりかし。よしや命だにとて。夜のおましに入り給ひぬ。

聞えわづらひ給ひて。うち歎きて臥し給へるも。なま心づきなきにやあらん。ねぶたけにもてなして。とかう世を思しみだるゝ事多かり。かの若草の生ひ出でんほどの猶ゆかしきを。似けなき程

と思へりしもことわりぞかし。いひより難き事にもあるかな。いかに構へて。唯心やすく迎へ取りて。明暮のあぐさめにも見ん。兵部卿の宮は。いとあてになまめい給へれど。にはひやかにどもあらぬを。いかでかの一ぞうに覺え給ひつらん。ひとつ后腹なれはにや。なぞおもほす。ゆかりいとむつまじきに。いかでかと深うおもほす。

又の日御文奉れ給へり。僧都にもほのめかし給ふべし。尼上には。もてはなれたりし御けしきのつゝましさに。思ひ給ふるさまをも。えあらはしはて侍らずなりにしをなん。かばかり聞ゆるにても。おしなべたらぬ志の程を御覧じ知らば。いかにうれしう。なぞあり。中にちひさく引き結びて。

面かけは身をもはおれず山ざくら。心のかぎりとめてこしかと。夜の間の風もうしろめたうあん。とあり。御手なごはさるも

のにて。唯はかなう押し包み給へるさまも。さだすぎたる御目ごもには。目もあやに好ましう見ゆ。

あかかたはらいたや。いかゞ聞えんと思しわづらふ。ゆくての御事は。なほさりにも思ひ給へなされしを。ふりはへさせ給へるに。聞えさせんかたなくなん。まだ難波津をだに。はかゞしう續け侍らさんめれば。かひなくなん。さても。

あらしふく尾上の櫻散らぬまを。心とめけるはごのはかなさ。いとゞうしろめたうとあり。

僧都の御かへりも同じさまなれば。口惜しくて。二日三日ありて。惟光をぞ奉れ給ふ。少納言のめのとしいふ人あんべし。尋ねて委しく語らへ。なごのたまひ知らす。さもかゝらぬ隈なき御心かな。さはかりいわけなげなりしけはひを。まはならねども。見し程を思ひやるもをかじ。

わざとかう御文あるを。僧都もかしこまり聞え給ふ。少納言に消
息してあひたり。くはしうおもほしのたまふさま。大方の御有様
なごかたる。言葉多かる人にて。つきづくしう言ひ續くれど。い
とわりなき御はさを。いかにおほすにかと。ゆゑしうあん。誰
もくおほしける。

御文にも。いとねんころに書い給ひて。かの御はちがきなん。
猶見給へまほしきとて。例の中なるには。

あさか山あさくも人を思はぬに。なご山の井のかけはなるら
ん。御かへし。

汲みそめてくやしと聞きし山の井の。淺きあがらやかげを見
すべき。惟光も同じ事をきこゆ。このわづらひ給ふ事よろしく
は。このころすぐして。京の殿に渡り給ひてなん。聞えさすべき
ごあるを。心もとなうおもほす。

かの山寺の人は。よろしうなりて出で給ひにけり。京の御すみか
尋ねて。時々の御消息なごあり。

月をかしき夜。忍びたる所に。辛うじて思ひ立ち給へるを。時雨
めいてうちろくぐ。たはする所は。六條京極わたりにて。内より
なれば。少し程遠き心地するに。荒れたる家の木立いごものふり
て。こぐらう見ねわたるあり。例の御供に離れぬ惟光なん。故按察
使の大納言の家に侍り。一日物のたよりにごぶらひて侍りしかば。
かの尼上いたうよわり給ひにたれば。何事も覺はずごなん申して
侍りし。と聞ゆれば。あはれのこごや。ごぶらふべかりけるを。
なごかさなんごも物せざりし。入りて消息せよ。このたまへば。
人入れてああいせさす。
わざごかう立ちより給へる事ご。いはせたれば。入りてかく御と

ぶらひになんたはしましたる。こいふに。驚きて。いごかたはらいたきこかな。この日頃むけにいごたのもしけなくならせ給ひにたれば。御對面をどもあるまじ。こいへども。返し奉らんはかしこしこて。南のひさし引きつくりひて。入れ奉る。いごむつかしけに侍れど。かしこまりをたにこてなん。ゆくりあう物深きたまし所になん。ご聞ゆ。けにかゝる所は。例に違ひてたばさる。

常に思ひ給へ立ちながら。かひなきさまにのみもてなさせ給ふに。つゝまれ侍りてあん。惱ませ給ふことをも。かくこもうけたまはらざりけるたばつかあさ。あご聞ゆ給ふ。

みたり心地は。いつこもあくのみ侍り。かぎりのさまにあり侍りて。いごかたじけなく立ちよらせ給へるに。みづから聞ゆさせぬ事。のたまはする事のすぢ。たまさかに思しめしかはらぬやう侍

らば。かくわりなき齡過ぎ侍りて。かあらずかすまへさせ給へ。いみじく心細けに見給へれくあん。願ひ侍る道のほたしに。思ひ給へられぬべき。なご聞ゆ給へり。いご近ければ。心ぼろけなる御聲たはく聞ゆて。いごかたじけあきわざにも侍るかあ。この君たに。かしこまりも聞ゆ給ひつべき程ならましかば。このたまふ。

あはれに聞き給ひて。何か淺う思ひ給ゆん事ゆゑ。かうすきくしきさまを見ゆ奉らん。いかなる契にか。見奉りうめしより。あはれに思ひ聞ゆるも。あやしきまで。この世の事には覺ゆ侍らぬ。あごのたまひて。かひなき心地のみし侍るを。かのいわけあう物し給ふ御一聲。いかでか。このたまへば。いでやよろづたもほし知らぬさまに。大ごのごもり入りて。なご聞ゆる折しも。あなたより來る音して。うへころ。この寺にありし源氏の君ころ。たはし

たんあれ。あご見給はぬ。このたまふを。人々いごかたはらいたしご思ひて。あなかまご聞ゆ。いさ。見しかば心地のあしきなくさめきご。のたまひしかはぶかしご。かしこき事きゝねたりご思してのたまふ。

いごをかしご聞き給へご。人々の苦しご思ひたれば。聞かぬやうにて。まめやかある御ごぶらひを聞け置き給ひて。かへり給ひぬ。けにいふかひあのけはひや。さりごも。いごよう教へてん。ごたぼす。

またの日も。いごまめやかにごぶらひ聞け給ふ。例のちひさくて。

いわけあきたづの一聲きゝしより。あしまにあづむ船がねならぬ。同じ人にやご。殊更をさなく書きあし給へるも。いみじうをかしけなれば。やがて御手本にご。人々さこゆ。

少納言が聞けたる。問はせ給へるは。今日をも過し難けなるさま

古今集
堀江こづ
なかし舟こ
ぎかへり同
ひ人にや戀
んわたりな

にて。山寺にまかりわたる程にて。かう問はせ給へるかしこまりは。この世あらでも聞けさせん。ごあり。いごあはれごおぼす。かななづきに朱雀院の行幸あるべし。舞人なご。やんごごあき家の子ごも。上達部殿上人ごもあごも。うの方につきくしきは。皆ゆらせたまへれば。みこたち大臣より始めて。ごりぐのざねごも習ひ給ふ。いごなし。

山里人にも久しう音づれ給はざりけるを。思し出で。ふりはへ遣したりければ。僧都の返事のみあり。立ちぬる月の廿日のほどになん。遂に空しく見給へなして。世間の道理なれご。悲しび思ひ給ふる。あごあるを見給ふに。世の中のはかあきもあはれに。うしろめたけに思へりし人もいかあらん。をさなき程に戀ひやすらん。故御息所にたくれ奉りしあご。はかぐしからねご思ひ出で。浅からずごぶらひ給へり。少納言。ゆるなからず御返りあ

ご。聞はたり。
 忌なご過ぎて。京の殿になんご聞き給へば。程へて。みづからの
 ごかある夜たはしたり。いごすごけに荒れたる所の。人ずくな
 るに。いかにをさなき人たろろしからんご見ゆ。
 例の所に入れ奉りて。少納言。御有様を。うち泣きつゝ聞は續
 くるに。あいなう御袖もたゞあらず。宮に渡し奉らんご侍るを。
 故姫君の。いごなきけなく憂きものに。思ひ聞は給へりしに。い
 とむけにちごあらぬ齡の。またはかくしう。人のたもむけをも
 見知り給はず。中空なる御ほごにて。あまた物し給ふなる中の。
 あなづらはしき人にてや。まじり給はんご。過ぎ給ひぬるも。
 世ご共にたもほし歎きつるも。しるき事多く侍るに。かくかたじ
 けなきあけの御言の葉は。後の御心もたごり聞はさせず。いご嬉
 しう思ひ給へられぬべき。折節に侍りながら。少しもなずらひあ

後撰集
 人しれぬ身
 はいろげご
 も年をへて
 なご逢坂の
 関たき

るさまにも物し給はず。御年よりも若びて習ひ給へれば。いごか
 たはらいたく侍り。ご聞ゆ。
 何かうくりかへし聞はしらする心の程を。つゝみ給ふらん。う
 のいふかひなき御有様の。あはれにゆかしう覺は給ふるも。ちぎ
 り殊になん。心あがら思ひ知られける。猶人づてあらで聞は知ら
 せばや。
 あしわかか浦にみるめはかたくごも。こは立ちながらかへる
 波かは。めざましからん。ごのたまへば。けにこらういごかしこけ
 れごて。
 よる波の心もしらでわかか浦に。玉藻なびかんほごうきた
 る。わりなき事ご。聞ゆるさまのなれたるに。少し罪ゆるされ給
 ふ。なご越はざらんご。うちずんじ給へるを。身にしみて若き人々
 思へり。

君は上を戀ひ聞に給ひて。泣き臥し給へるに。御遊びがたきごもの。直衣着たる人のたはする。宮のたはしますなんめり。ご聞ゆれば。起き出で給ひて。少納言よ。直衣着たりつらんはいづら。宮のたはするかとて。よりたはしたる御聲。いさらうたし。宮にはあらねど。又たもほし放つべうもあらず。こちこのたまふを。耻かしかりし人ご。さすがに聞きあして。あしういひてけりご思して。めのこにさしよりて。いざかし。ねぶたきにこのたまへば。今更なご忍び給ふらん。この膝の上に大殿ごもれよ。今少しより給へこのたまへば。乳母の。されはころ。かう世づかぬ御程にてなんこて。押しよせ奉りたれば。何心もあく居給へるに。手をさし入れて探り給へれば。なよ、かある御衣に。髪はつやくごかゝりて。末のふさやかにさぐりつけられたる程。いと美しう思ひやらる。

いごあはれに見奉る御有様を。今はまして片時のまもたばつかなかるべし。明暮ながめ侍る所にわたし奉らん。かくてのみはいかゞ。ものたぢし給はざりけり。このたまへば。宮も御迎になご聞に給ふめれど。この御な、あぬか過してやあご思ひ給ふる。ご聞ゆれば。たのもしきすぢあがらも。よろしくにてならひ給へるは。同じうこ疎う覺に給はめ。今より見奉れど。淺からぬ志はまさりぬべくあんこて。かい撫でつゝ。顧みがちにて出で給ひぬ。をかしかりつる人の名殘戀しく。ひこりゑみしつゝ臥し給へり。日高う大殿ごもりたきて。文やりたまふに。書くべき言の葉も例ならねば。筆うち置きつゝすさび居給へり。をかしき繪なごをやり給ふ。

かしこには。今日しも宮わたり給へり。年頃よりもこよあう荒れまさり。廣う物ふりたる所の。いご人ずくなにさびしければ。

見渡し給ひて。かゝる所には。いかでかしはしも。をさなき人の
過し給はん。猶かしこに渡し奉りてん。何の所せき程にもあらず。
乳母は曹子あごしてさぶらひなん。君は若き人々あごあれば。諸
共に遊びて。いごよう物し給ひなん。あごのたまふ。
近う呼び寄せ奉り給ふに。かの御移香の。いみじう艶にしみかへ
り給へれば。をかしの御にほひや。御ぢはいごなにてこ。心苦し
けにたばいたり。

年頃も。あつしくきたすぎ給へる人にうひ給へるより。時々かし
こに渡りて。見あらし給へなごものせしを。あやしう疎みたまひ
て。人も心たくめりしを。かゝる折にしも物し給はんも心苦しう。
あごのたまへば。何かは心ぼろくこも。しばしはかくてたはしま
しあん。少し物の心たもほし知りなんに。渡らせ給はんころ。よ
くは侍るべけれ。ご聞ゆ。夜晝戀ひ聞は給ふに。はかあき物も聞

しめさずこて。けにいごいたう面瘦せ給へれご。いとあてに美し
く。なか／＼見は給ふ。

何かさしもたもほす。今は世にあき人の御事はかひあし。たのれ
あれば。なご語らひ聞は給ひて。暮るれば歸らせ給ふを。いご心
細しご思ひて。泣い給へば。宮もうちあき給ひて。いごかう思ひ
な入り給ひろ。今日明日渡し奉らんあご。かへす／＼こしらへた
きて。出を給ひぬ。名残も慰めがたう泣き居給へり。
ゆくさきの身のあらん事をごまでもたばし知らず。唯年頃立ち離
るゝ折なう。まつはしからひて。今はあき人どかり給ひにけるこ
れぼすがいみじきに。をさなき御心地なれご。胸つごふたがりて。
例のやうにも遊び給はず。晝はさても紛らはし給ふを。夕暮ごあ
れば。いみじうくし給へば。かくてはいかでか過し給はんご。慰
めわびて。乳母も泣きあへり。

君の御許よりは。惟光を奉れ給へり。参りくべきを。内よりめしあればなん。心苦しう見奉りしも。しづ心をつくして。この人奉れ給へり。

あぢきまうもあるかあ。戯にても。物のはじめにこの御ことよ。宮聞しめしつけば。さぶらふ人々のたろかあるにぞさいなまれん。あなかしこ。物のついでに。いわけなくうち出で聞かせ給ふな。あごいふも。うれをば何ごもればしたらぬぞ。あさましきや。

少納言は。惟光にあはれある物語ごもして。ありへて後や。さるべき御すくせのがれ聞給はぬやうもあらん。只今は。かけてもいご似けあき御事ご見奉るを。あやしうたぼしのたまはするも。いかなる御心にか。思ひよるかたあう乱れ侍る。今日も宮渡らせ給ひて。うしろやすくつかう奉れ。心をさなくもてなし聞ゆな。なごのたまはせつるもいごわづらはしう。たなるよりはかゝる御

すきごとも。思ひ出でられ侍りつる。なごいひて。この人も。事ありがほにや思はんあご。あいあければ。いたう歎かしげにもいひあさず。太夫もいがある事にかあらんご。心ながたう思ふ。参りてありさまあご聞ければ。あはれにたぼしやらるれご。さて通ひ給はんも。さすがにすろある心地して。軽々しうもてひがめたる事ご。人もや漏り聞かんご。つましければ。唯迎へてんごたもほす。御文は度々奉れ給ふ。暮るれば例の太夫をぞ奉れ給ふ。さはる事ごものありて。に参り來ぬを。たろかにやなごあり。宮より。明日俄に御迎にこのたまはせたりつれば。心あわたしくてあん。年頃の蓬生をかれあんも。さすがに心ぼうう。さぶらふ人々も思ひ亂れてご。言すくなにいひて。をさくあへしらはす。物縫ひいごなむけはひなごしるければ。参りぬ。

風俗歌
常陸には田
をころ作れ
あだ心がぬ
とや君がぬ
山を越え野
を越え雨
夜きませる

君は大殿におはしけるに。例の。女君ごみにも對面し給はず。物
むつかしう覺ゆ給ひて。あづまをすがき。ひたちには田をこ
ろ作れ。こいふ歌を。聲はいこなまめきて。すさび居給へり。
参りたれば。召し寄せて有様問ひ給ふ。しかく、なんと聞ゆれば。
くちをしようおぼして。かの宮に渡りおぼ。わざご迎へ出でんもす
きくしがるべし。幼き人を盗み出でたりこ。もごきおひまん。
ろのさきに。しばし人にも口がためて渡してん。ごおぼして。曉
かしこにもものせん。車の装束さながら。隨身一人二人仰せたまて
たれ。このたまふ。うけたまはりて立ちぬ。
君は。いかにせまし。聞ひありてすきがましきやうなるべき事。
人のほごたに物を思ひ知り。女の心かはしける事。れしはから
れぬべくはよのつねあり。父君の尋ね出で給へらんも。はしたな
うすぶろなんべきをこ。思し亂るれど。さてはづしてんは。いこ

くちをしかるべければ。また夜深う出で給ふ。
女君例のしぶく。心も解けずものし給ふ。かしこにいさせち
に見るべきこの侍るを。思ひ給へ出で、なん。立ちかへり参り
來あんこて。出で給へば。さぶらふ人々も知らざりけり。我御方
にて御直衣あごは奉る。惟光ばかりを馬にのせておはしぬ。
門うち敲かせ給へば。心も知らぬもの、あけたるに。御車をやを
ら引き入れさせて。太夫妻戸を鳴らしてしはぶけば。少納言聞き
知りて出で來たり。こ、におはしますこいへば。をさあき人は大
殿ごもりてなん。あごかいこ夜深う立ち出でさせ給へるこ。物の
たよりご思ひていふ。宮へ渡らせ給ふべかんなるを。ろの先に物
一言聞ゆさせ置かんこてあん。このたまへば。何事にかは侍らん。
いかにはかくしき御いらへ聞ゆさせ給はんこて。うち笑ひて居
たり。

君入り給へば。いごかたはらいたく。うちさけて怪しきふる人ごもの侍るにこ。聞ぬさす。またたごろい給はじな。いで御目さまし聞ぬん。かゝる朝霧をば知らでいぬるものか。こて入り給へば。やごもぬ聞ぬず。君は何心もあく寐給ひつるを。抱き驚かし給ふに驚きて。宮の御迎におはしたるこ。寐たびれておぼしたり。みぐしかきつくろひあごし給ひて。いざ給へ。宮の御使にて参り來つるぞ。このたまふに。あらざりけりこあきれて。恐ろしと思ひたれば。あなこゝろう。まろも同じ人ぞこて。かき抱きて出で給へば。太夫少納言あご。こはいかにこ聞ゆ。

こゝには常にもぬ参らぬが覺束なければ。心やすき所にこ聞ぬしを。心うくわたり給ふべかんなれば。まして聞ぬ難かるべければ。人ひごり参られよかし。このたまへは。心あわたしくて。今日はいごびんあくあん侍るべき。宮の渡らせ給はんには。いかさま

にか聞ぬやらん。たのづから程へて。さるべきにたはしまさば。ごもかうも侍りあんを。いご思ひやりなき程の事に侍れば。さぶらふ人々苦しう侍るべしこ。聞ゆれば。よし後にも人は参りなんかしこて。御車寄せさせ給へば。あさまじう。いかさまにかご思ひあへり。若君も。あやしこたぼして泣い給ふ。

少納言留め聞ぬん方なければ。よべ縫ひし御ぞごもひきさけて。自らもよろしき衣着替へて乗りぬ。二條の院は近ければ。また明うならぬ程におはして。西の對に御車寄せており給ふ。若君をば。いご軽らかにかき抱きてわろし給ふ。

少納言。猶いご夢の心地し侍るを。いかにし侍るべきここにかごて。やすらへば。うは心あんあり。御身づからは渡し奉りつれば。かへりあんごあらば送りてんかし。このたまふに。わりなくてたれぬ。俄にあさまじう。胸も静ならず。宮のたぼしのたまはん事。

いかにありはて給ふべき御有様にか。ごてもかくても。たのもま
き人々にわくれ給へるがいみじき。ご思ふに。涙のごまらぬを。
さすがにゆゝしければ。念じ居たり。

こなたは住み給はぬ對なれば。御帳をなかりけり。惟光めし
て。御帳御屏風など。あたりくしたてさせ給ふ。

明け行くまゝに見渡せば。わどづのつくりさま。しつらひさま。
更にもいはず。庭のすまごも玉を重ねたらんやうに見て。輝く
心地するに。はしたなく思ひ居たれご。こなたには女なごもさぶ
らはざりけり。疎きまらうごなどの参る折節の方なりければ。男
ごもぞみすのこにありける。

かく人迎へ給へりと聞く人は。誰ならん。わぼろけにはあらじ。
ごさゝめく。御手水御粥など。こなたにまゐる。

人なくてあしかんめるを。さるべき人々。夕づけてころは迎へさ

せ給はめ。このたまひて。對にわらはべめしにつかはす。小さき
かぎり殊更に参れごありければ。いごをかしげに四人参りたり。
御かたちはさしはなれて見しよりも。いみじう清らにて。なつか
しう打ちかたらひつゝ。をかしき繪あうび物ごも。取りにつかは
して見せ奉り。御心につくべき事ごもをし給ふ。やうく起き出
で、見給ふ。鈍色のこまやかなるが。うちなれたるごもを着給ひ
て。何心なくうち笑みなごして居給へるが。いごうつくしきに。
我もうち笑まれて見給ふ。

東の對に渡り給へるに。立ち出で。庭の木立。池の方なごのぞ
き給へば。霜枯の前裁繪に書けるやうにおもしろくて。見も知ら
ぬ四位五位こさませに。隙をう出で入りつゝ。けにをかしき所か
かとおぼす。御屏風ごもなど。いごをかしき繪を見つゝ。慰めて
おはするもはかなしや。

六帖
知らぬども
いさしのかと
いへばよこ
たいぬよし
やされぬよ
紫のゆゑ

君は二日三日内へも参り給はで。この人をなつけ語らひ聞に給ふ。やがて本にもごおぼすにや。手習繪など。さまざまにかきつゝ見せ奉り給ふ。いみじうをかしげにかき集め給へり。むさし野さいへばかこたれぬご。紫の紙に書い給へる墨つきのいと異なるを。取りて見居たまへり。いで君もかい給へごあれば。またようはかゝずこて。見上げ給へるが。何心なく美しげなれば。うちほゝるみて。よからねごむけに書かぬころわろけれ。教へ聞にんかし。このたまへば。うちうばみてかい給ふ手つき。筆ごり給へるさまのをさなげなるも。ちうたうのみ覺ゆれば。心ながらあやしごたもほす。

かきうこなひつご。耻ぢて隠し給ふを。強ひて見給へば。

かこつべき故をしらねばはつかな。いかなる草のゆかりなるらん。さいどわかけれど。たひさき見にて。ふくよかに書い給

へり。故尼君にぞ似たりける。いまめかしき手本習はゞ。いごよ
うかい給ひてんご。見給ふ。雖なご。わざご屋ごも作り續けて。
諸共に遊びつゝ。こよなき物思ひのまぎらはしなり。
かのごまりにし人々。宮渡り給ひて。尋ね聞に給ひけるに。聞に
やらん方なくてぞ。わびあへりける。しばし人に知らせじご。君
ものたまひ。少納言も思ふ事なれば。せちに口がためやりつゝ。
唯ゆくへも知らず。少納言がゐて隠し聞にたるごのみ。聞にさす
るに。宮もいふかひなうおぼして。故尼君もかしこに渡り給はん
事を。いご物しごたばしたりしごこなれば。乳母いごさし過ぎた
る心はせのあまり。たいらかにわたさんを。びんなしなごはいは
で。心にまかせて。ゐてはふらかしつるなんめりご。泣くく歸
り給ひぬ。もし聞き出で奉らば告げよ。このたまふもわづらはし
く。僧都の御許にも尋ね聞に給へご。あごはかなくて。あたらし

かりし御かたちなご。戀しく悲しこたばす。北の方も。母君をにくしこ思ひ聞に給ひける心も失せて。我心に任せつべうおもほしけるに。違ひぬるはくちをしうたばしけり。

やうく人參り集まりぬ。御遊がたきのわらはべちごごも。いごめづらかにいまめかしき御有様ごもなれば。思ふ事なくて遊びあへり。

君は。男君のたはせずなごしてさうくしき夕暮なごばかりぢ。尼君を戀ひ聞に給ひて。うち泣きなご給へご。宮をば殊に思ひ出で聞に給はず。もこより見ならひ聞に給はでならひ給へれば。今は唯この後の親を。いみじうむつびまつはし聞に給ふ。物よりたはすれば。まづ出で向ひて。あはれにうちかたらひ。御ふごころに入り居て。いさか疎く耻かしこも思ひたらず。さる方にはいみじうらうたきわざなりけり。

さかしう心あり。何くれこむつかしきすぢにありぬれば。我心地も少し違ふしも出でくやご。こころたかれ。人もうらみがちに。思の外の事もたのづから出で来るを。いごをかしきもてあうびなり。むすめなごはた。かばかりになりぬれば。心やすく打ちふるまひ。へたてなきさまに。起き臥しなごは。ねしもすまじきを。これはいご様かはりたるかしづきぐさなりと。たばいたんめり。

源氏讀本 四 終

語釋

○けんがた^二…^頁…^三 驗方の文字にて佛法の調伏祈。○小柴^三…^頁…^三 小柴垣の略。○闕伽^三…^頁…^三 佛に奉る水。○新發意^四…^頁…^四 シボナと讀む。新しく剃髪したるをいふ。○よぎり^二…^頁…^二 其家をよけて通り過ぐるをいふ。俗に素通りといふに同じ。○瀧のよごみ^七…^頁…^七 瀧のよごみの誤にやといふ説あり。こよみは響の事。○さしぐみに^三…^頁…^三 うちつけにこいふに同じ。○すきひがめる^三…^頁…^三 齒の抜けて聲のもるゝ有様。○ぐうづきて^三…^頁…^三 功者づくをいふ。○優曇華^三…^頁…^三 佛書に優曇華は金輪王出世の瑞なり。故に靈瑞花と號す。人壽八萬歳の時節。金輪王四州を遠る。こあり。○獨鈷^三…^頁…^三 佛器の名。○一ぢう^三…^頁…^三 一族。○難波津^三…^頁…^三 昔は難波津にさくや此花冬こもり今は春へこ咲くや此花。こいふ歌を習字の始にあらひたり。○あさか山^三…^頁…^三 難波津と同様に習ひたるは。淺香山かけさへ見ゆる山の

井の淺き心をわが思はなぐに。こいふ歌なりき。○鈍衣五十一…喪服の色。紫上祖母君の喪中なればなり。

明治三十五年四月廿五日印刷
 明治三十五年四月廿八日發行

定價 金廿五錢



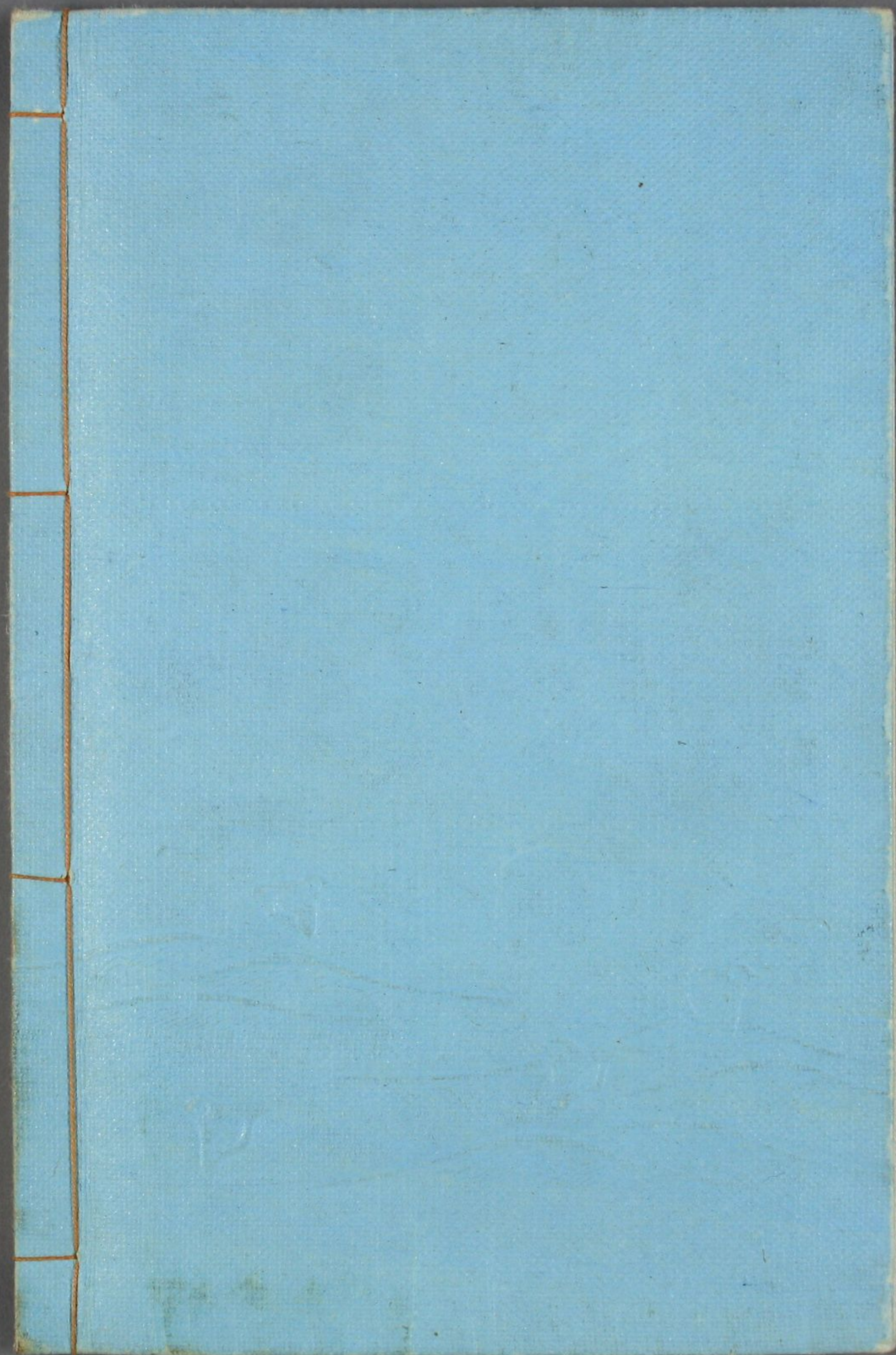
大賣捌

東京市日本橋通三丁目 林 平次郎
 全京橋區南傳馬町三丁目 目 黒支店
 大阪市備後町四丁目 吉岡 平助
 京都市東洞院三條東へ入 村上勘兵衛

名古屋市本町三丁目 川瀬 代助
 仙臺市大町五丁目 藤崎祐之助
 長野市大門町 西澤喜太郎
 松本本町二丁目 高美 書店

校訂者 東京市牛込區東櫻町二十番地 大和田 建樹
 發行者 東京市神田區裏神保町六番地 上原 才
 發行所 東京市神田區猿樂町二丁目二番地 上村 龍之助
 印刷者 東京市神田區猿樂町二丁目二番地 博信 堂
 印刷所 同上





大和四建樹大人校訂

源氏讀本 若紫の巻 四

東京 跡見女学校蔵版